

「 さ さ え 」

2011年4月発行 情報誌 第35号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所:福岡県田川市伊田4395(福岡県立大学附属研究所 生涯福祉研究センター - 内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします

【商品名】 床ずれ防止用ハイブリッドマットレス

「アルファプラ ソラ」

床ずれ防止には体圧分散+ケアが重要にもかかわらず、これまでのマットレスは体圧分散ばかりを求めていました。医療やテクノロジーの進化にともなって常識も進化します。これからは、ポジショニングや介助のしやすさ、ご利用者のQOLなどを総合的に考慮したマットレスをお選びください。アルファプラ ソラは安定性と寝心地の良さを持つ静止型マットレスをベースに、リスクの高い腰部には新方式のエアセルを搭載。双方の利点を兼ね備えた、ポジショニングなど最新のケアがしやすいこれからのマットレスです。【発売元】(株)タイカ



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

「ひきこもり」は病ではない

NPO 福祉用具ネット理事長 豊田謙二(熊本学園大学教授・博士)

「ひきこもり」は、ある若者の生活状況についての定義なのだが、ご存知でしょうか。とても重要な意味をもつもので、ここで考察してみたい。研究者は別にして、国レベルにおいて「ひきこもり」の定義が割れている。厚労省と内閣府の対立である。中央官庁の内部対立は常識的なので取り上げる必要はない、というご意見もある。だが、この件に関してはこの本質に関わる問題であり、問題の所在をはっきりしなければならない。

「ひきこもり」とは、6ヶ月以上家庭にとどまる状況にあること、ということなのだが、そのとどまりかたにおいて、両者の対立がある。つまり、厚労省は統合失調症に近い判断、内閣府は社会的要因の重視、である。病因説か社会説か、の対立である。その判断の基準は事例の積み重ねにあり、一人ひとりの生活環境に注目すべきことである。

2009年の内閣府調査によれば、「ひきこもり」のきっかけは、という設問に、「職場」不適應(23.7%)、「病気」(23.7%)、「就活」の不調(20.3%)、この3つの項目だけで67.7%に達する。「不登校」は(11.9%)である。不登校については、文科省の2008年度調査がある。小学生2万2千人、中学生10万7千人、1クラスには最低1名であり、その深刻さを共有したい。

家庭という私的領域から学校という公的領域へと出かけること、それが個々の人間の力を培うのだが、同時にここに一人ひとりにとっては、「学校」というとても大きなハードルがある。なぜ、「公的領域」の学校で学ぶのか、その問いに誠実に答え得る人は少ない。

2011年の2月に福岡市で「不登校を考える講演会」が開催され、そこで貴重な知見を得た。そのなかで注目したのは当事者でありつつ、講師として、いわゆる「不登校」の体験者の発言である。その発言は極めて秀逸であり参考に値する。以下に、簡潔に記す。

たとえば、学校内の人間関係のトラブルでAさんが学校から遠ざかる。家からときに出ると、他者は「どうして家にいるのか」と、当事者に問う。そこには目に見えない「強制」がはたらいている。だから、当事者はその質問あるいは苦言をおそれて外へ出れない。外出できないこと、つまり「ひきこもり」と括られる。当事者を社会が排除することなのである。これは社会的排除(ソーシャル・インクルージョン)と呼ばれている。「ひきこもり」は、社会と包摂に向うように要請している、私はそう思うのである。

足と靴の相談室 ~ FPU(福岡県立大学)ブランドの靴 ~

福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター 助手 中藤 広美 (NPO福祉用具ネット理事)

福岡県立大学ブランドの靴(FPU靴)が商品化して早いもので2年と半年が経過しました。一度、この靴を履きその優れた機能に触れた方達がリピーターとなっています。リピーターと口コミでFPU靴を求める人が次第に増え、ありがたいことに追加生産が何度もなされているようです。

実は現在FPU靴を入手できる場所は限られています。福岡県内では「福岡県立大学足と靴の相談室(田川市と福岡県庁内)」、「足と靴の相談室ぐーぱ(大牟田市)」、「足と靴の相談室 エルデ(東京都新宿区)」、他関東で3店舗です。というのも、FPU靴は靴本来の機能をしっかりと持たせドイツ整形外科靴技術の考え方を取り入れてそこに日本人の骨格を考慮しながら開発された靴です。その為、靴をお渡す時には開発のコンセプトの知識を持っていることが求められます。間違った選び方や、はき方をするとFPU靴の効果が十分に発揮されないのです。

人間の健康や快適さを考えた時、その選び方や使い方は「適当」であってはならないのです。その方の心身の状態、生活様式などなどその方をできるだけトータルに見つめて、コミュニケーションをとりながら選定する。NPO福祉用具ネットや「足と靴の相談室」の活動を通して再確認中です。

[FPU靴の問合せ先:福岡県立大学足と靴の相談室 0947-42-2119 中藤]

自動採尿システム【尿吸引ロボ ヒューマニー】を上手に使うために

その6 介護施設での実践報告

NPO福祉用具ネット 事務局 大山 美智江(看護師)



このコーナー「その2」で、床ずれのある方への利用法についてご紹介させていただきました。先日、ある介護施設の特別養護老人ホームで床ずれ事例にヒューマニーを活用して床ずれが治癒したとの報告を受けました。ご存知のように特別養護老人ホームには常勤の医師はいないし、看護職員も日中のみで夜間は不在となります。このような体制の中でもやはり医療依存度の高い入所者も多く、命をあずかる最前線の介護スタッフの労力とストレスは大変なものだと推察できます。そんな中で身体機能の低下や栄養状態の悪化などで残念ながら床ずれが発生してしまうと、その改善のための介護はとても大変なことだと思います。床ずれの悪化はとても早く進行し、それを治すのは大変な時間と労力を費やすことになります。

前回のこのコーナーでヒューマニーを活用することで、尿量や色の把握ができることの意義についてご紹介いたしましたが、この製品が介護の現場のスタッフの皆様の一助になっていることを実感しました。最期の段階で病院への移送をせずに特別養護老人ホームで看取りをする事例も増えていると聞きます。終末期の時期において、血圧や呼吸や脈拍や皮膚の色などとともに尿量の変化は死期を推測するひとつのパロメーターにもなります。医療職の少ない施設にとっては客観的に排尿状態を監視できることはとても心強いものだと思います。オムツ内では度々観察することもできず、尿量も把握できません。(入院している場合には留置カテーテルで観察しています。)尿吸引ロボ ヒューマニーは尿量を観察するロボットの役割を担って、利用者様の最期の身体負担の軽減に役立ち、さらに介護スタッフにも心理的サポートをしてくれるものと考えれば素晴らしい機器ではないかと感じました。このような活用方法があることを学ばせていただきました。

さて、この施設での床ずれの活用について施設のご協力で情報をいただきましたので発症から治癒までの経過を簡単にご紹介させていただきます。

事例の概要

74歳 女性 身長152cm 体重36.3kg

要介護度5

脳出血右マヒ 栄養 ミキサー食 全介助

方法 原則一日1回の採尿パッド交換。交換前後に排便コントロール。創処置はパッド交換時に実施。入浴は週に2回。

経過

- ・平成22年11月4日左臀部(仙骨部付近)1.5cm × 2cmの発赤あり処置開始
- ・11月25日 表皮剥離 ・11月30日 悪化
- ・12月 3日 ヒューマニー使用開始
- ・12月13日 壊死部分切除。その後徐々に経過
- ・平成23年2月1日 治癒を確認

治癒までの経過は上の写真をご参照下さい。

施設職員によるヒューマニーの活用効果に対する感想は以下のとおり。

尿汚染による感染防止を図る。

尿汚染によるガーゼ交換の手間を軽減できる。

尿量の把握による水分管理が容易となる。

尿の吸引を確認できることでオムツ内観察の頻度を少なくでき、介護職にはとても助かった。…

床ずれの要因は局所の問題ではありません。施設職員が一丸となって、体位変換やポジショニング、栄養補給などすべてに最大限の努力をされた結果、治癒させることができたのだと思います。

特に、今回はNPOの紹介記事を参考に施設職員の判断でヒューマニーを活用したこと、その結果、複数の職員がヒューマニーを上手に取り扱えたことです。さらに、本事例は2月1日に床ずれの治癒を確認して通常のオムツに戻した直後に再び表皮剥離し悪化したとのことでした。改めて床ずれとオムツについて考えさせられたそうです。尿量とパッドの種類、交換時間など工夫と努力の結果、ようやく改善することができたとのことでした。

在宅介護を振り返ってみたい ～私の13年間～

宮若市 佐野 征子

「おはよう！」「グッドモーニング」「今日の体調は如何？」「私の大事なダンナ様！」とうるさい程の話しかけにニコリ！…。ニコリしてくれるとホットする私です。

まずはオムツ交換、熱いタオルで顔や手を拭きながら、顔色・表情・尿の色と量・全身のチェックをすることから一日の始まりです。

体位変換をし、朝食の準備をする。といっても、現在は【胃ろう】からの流動食の注入です。人肌に温めて、薬・水分とともに注入する。

体調によっては痰の吸引をしてから始める。

決して定刻ではない。排便の後片付けをし、きれいに拭きあげて朝のコースもようやく一段落です。

本人は満腹したら、スヤスヤと一眠りに入る。私はバタバタと掃除・洗濯を終える。

10時過ぎには訪問リハビリを受ける。お陰で落ちていく体力や機能の維持ができていのように思える。

自分の意思表示、発語は殆んどないので、表情をよく観察し、異常をチェックすることが私の大きな仕事の一つとなっています。

現在の夫は主人であり、また私にとっては3番目の赤ちゃんになる時もある。

今、週2回の訪問リハビリ、週1回の訪問看護、月に1回の主治医の往診をしていただいている。また、週に4回入浴を目的にデイサービスに行っている。送迎は私の役割。福祉車両のマイカーに車椅子ごと主人を乗せて送迎の日々を送っている。

こうして振り返ってみると、本当に多くの方々の支えで今日まで生かされてきたのだと感謝している。

また、最近ではNPOの大山事務局長との出会いがあり、介護テクニックや便利な福祉用具を紹介してもらったりで親身にアドバイスをいただいている。

最新の福祉用具の尿吸引口ボヒューマニも活用しているが、当初は失敗も多かった。その都度、開発者のユニ・チャームや九州日立マクセル(株)のサポートをしていただいた。そのことで開発者の皆様とも直接のご縁もでき、私の介護生活もさまざまな人と出会いが生まれ、新しい方向に進みだしたような気がしている。

オムツ交換が随分と楽になり、この「ヒューマニ」はオムツの神様のような存在になりました。

また、これまでの介護の体験談についての原稿の依頼を大山さんから受けた時も、私にとっては予想もしない出来事でした。

少し躊躇しましたが、13年目を迎える私の介護生活の人生の一区切りとして振り返ってみようと一大決心、拙い文ながらペンを執ることにしました。

よく“一寸先は闇”と申しますが、私の場合も正にそのとおりでした。

「気をつけて行っておいで」と送り出され、友人との北京旅行から福岡空港に戻ると、出口には知らせていなかった弟夫婦が立っている。「誰を迎えに来たのだろうか」と思って近づくと、いきなり「びっくりしたらいかんよ」と言われた。主人が早朝、交通事故に遭い緊急入院し、救急の処置を済ませてICUに入院中だと車の中で聞かされました。血の気が引いてしまい、自分にすっかりなくてはと言い聞かせ、涙を拭きながら病院に急行したのです。

面会した夫は、包帯で巻かれた頭はパンパンに腫れあがり、目・鼻・口だけ開き、全身はチューブだらけの状態。…身体が震え、涙が止まらなかった。

意識が戻るかどうか。この2～3日がヤマだとの主治医からの説明で、私は全身の震えと不安感がいっぱい毎日涙にくれました。その夜からICUの控え室のソファで一週間くらい寝泊りをしたのです。

楽しかった旅行の思い出は私の頭の中から全く消えてしまいました。

あれから今日までの13年間、私は夫の脳外傷の後遺症と闘いながら在宅介護の生活の日々を過ごしています。(つづく)

佐野様、NPOの情報誌「ささえ」への原稿を書きいただき心から御礼を申し上げます。介護する私達も多くの在宅介護者の皆様をしっかりと支えられるように努めたいと思います。(事務局大山)

キネステティクス R ベーシックコース 教師養成コースを終了して

NPO 福祉用具ネット会員 (理学療法士)

海尾 美年子

私は訪問看護ステーションで在宅の方の訪問リハに携わっています。その際に、ベッドから車椅子やポータブルトイレへの移乗、床からの立ち上がり等の介助を手伝ったり、ご家族への指導を行いながらも、自分の身体に負担のかかることに疑問を抱きながら仕事を続けていました。

ある日、何気なくケアプログレスジャパンのホームページを覗いたことが、【キネステティクス】との出会いとなりました。軽い気持ちでベーシックコースの研修会に参加し、興味の趣くままにズルズルとベーシックコース教師養成コースまで受講し、今年の3月2日に無事に終了することができました。

ここで私の受講したコースの内容についてご紹介します。それは、コースを重ねるにつれ“人の動き”というものの不思議さに気づかされる毎日だったということです。自分が何気なく動いている動作というものは、まずはその動きに気づく事から始まるということでした。

気づき (awareness) に注意することで自分の身体の各部 (頭や胸郭、骨盤、四肢) の重さの動きが徐々に実感できるようになります。日常行っている動作の立つ、座る、歩く等の様々な動きを感じて動くことで、今まで必要のない身体の部位にかけていた力をかけずに動けることがわかるようになりました。このように、動きに注意を向けることで、自分の身体の筋の緊張の変化が少しわかった感じがしました。これが、私が身体で1番実感できたことでした。

もう一つ、予想しなかった気づきがありました。それは、自分の身体の動きを感じることで (話は大きくなりますが、) 地球上での自分の存在を確認できることがわかったことです。自分の存在感を動きをとおして感じることは、私にとって精神面で大きな意味がありました。自分の存在感の認識は自分の精神安定へとつながりました。本当に不思議な感じがしました。

申し遅れましたが、創始者はアメリカ人である行動サイバネティクス博士のレニー・マイエッタ氏とフランク・ハッチ氏です。40年ほど前に【キネステティクス】を提唱し、現在では1700人程のトレーナーが育成され、ドイツやスイス、ベルギー、イタリア、オーストリアでコースを開催しています。8年前から日本でも開催されるようになりました。

自分の身体の動きを知って、介護される人の身体の動きを知り、その人の身体の資源として、できるだけ使いながら介護するという方法はドイツでは看護学校の基礎科目になっているそうです。

創始者のお二人はとてもおおらかで自然体な方です。学習はすべて“動き”を感じることから始まり、その後理論が付いてきます。自分自身で“動き”を感じなければ次に進めません。頭でわかっていても感じることは別物です。**感じる能力を磨くことで、自分の動きがより深く理解できます。自分の動きを理解できて初めて介護する人の動きをきちんと理解でき、その人の最大限の身体の資源を使わせて介助することが可能になります。**私は、ここがとても重要なことだということに気づきました。今まで、介護される人の身体の資源をきちんと評価もせずに (きちんと評価していてもそれを使わせることなく) 強引に抱え上げていたことに気づかされたのです。本当に基本的なことなのですが、毎日馴れ合いでこなしていた自分をおかしく感じました。

二人の指導には、押し付け等の強引さはなく、自分の動きの感覚を積み上げていくことでより深い理解を得ることができるということで貫かれています。

また、【キネステティクス】が人の介助に役立つこともあれば、そうでないこともあると言われ、常に課題となる“動き”を分析することにより解決策を見出していくことだと教わりました。

コース終了までは2年間を費やし、その間にはさまざまな事情等でとても大変なこともありましたが、**“人は常に動いている”こと、“自分の動きに注意を向けることで自分の動きに気づくことができる”こと、“動きをとおして別の自分を発見できた”**ことがわかり、このコースを受講して本当に良かったと実感しています。

筑豊地域では、キネステティクスのことはあまり知られていないようですので、今後学習会を定期的に関き、皆さんに知ってもらうようにしていきたいと思っています。在宅のご家族をはじめ、介護する人、される人が身体に負担のかからない介護ができるようになることを願いながら、皆さんにお声かけしていきたいと思っています。

キネステティクス R の詳しい情報はこちら

ケアプログレスジャパンのホームページ www.careprogress.co.jp

今、思うこと。「福祉用具の開発に王道なし」

(その25)

九州日立マクセル(株) 技師長 坂田 栄二

(NPO福祉用具ネット理事)

“シンプル設計”は“きれい”

帰山が大阪弁の達者な試作屋さんに、新設計のセルブロックの試作を頼んで何日か過ぎた。彼は殆ど毎日、スポンジや布カバーの改良に取り組んでいた。

そんなある日、試作品が彼のもとに届いた。箱の中のやや大きなセルブロックを見た帰山は、“にんまり”として満足気。

「さすがに、セル間をつなぐチューブが1つも無いと、きれい(シンプルなこと)じゃないか。」

エアーマットは、このエアーセルが命であることは誰もが認識していることであるが、接続チューブが1つも要らないから、信頼性も高いことは初めて見るお客にもすぐに理解してもらえ。これはコストを下げる効果以上に目に訴える力がある。彼はそう思って“にんまり”したのである。



6個のユニットを組合わせた 旧試作品



セル間チューブの無い 新試作品

上の2つの写真を見比べていただきたい。セル間の沢山の短いチューブがなくなったばかりでなく、周囲の長い給気チューブもブロックに一体に成形されている。

このセルは、隣同士が交互に膨れたり縮んだりする。彼はこの動作を「交互膨縮」方式と呼んだ。

交互に膨縮するには、空気を隣同士を避けながら配

管しなければならないが、配管組立て作業も要らない。それを松原と帰山の知恵で乗り切り、品質向上と信頼性アップに寄与したのである。もちろんこの難問パズル(?)の解決方法は特許申請された。

“パッ!”と膨らむエアーセルを作れ

エアーマットも、あちこち手が増えられ商品らしくなってきたところで、話をエアーポンプ本体の改良について進めよう。

大山の無理難題の要求、それは

「短時間で、それも秒単位でエアーセルが膨れるようにしてよ!ヘルパーさんは忙しくていろいろやることあるんだから、利用者さんの前で10分も20分も膨らむまでじっと待つことなんか出来んのやから。」

「スイッチをいれたら、‘パッ!’と膨らんで、すぐ寝られるようにせんとダメとよ!」

この要求を満足するようにしようとすると、馬鹿でかいエアーポンプが必要になる。当然、部品代は高くなる。大山の要求はいつも「ごもっとも」なのだが、設計者泣かせである。

松原は、気が優しい性格だから、

「そうやね!そうしようか!」

と納得してしまう。そしてそのあと、いつも‘どうしようか...’と悩む。確かにこれまでのエアーマットは、スイッチを入れて使用可能になるまで、10分以上の待機時間を要する。現行品は、大山の指摘する通り、使い勝手が悪い。これが解決すれば、注目を浴びるだろうし、利用者は喜ぶだろう。

空気が一杯の立体成型セル

そこで、松原が選んだポンプは、当然のことながら大型ポンプになった。さっそく試作品に大型ポンプとエアーセルを接続してみると、すぐにパンパンに膨れ上がった。ものの2~3秒である。松原の計算ではもう少し時間がかかるはずだった。なぜ計算と違うのか?松原は、はち切れんほど膨らんだエアーセルから、空気を抜きながら考えていた。そして、徐々にしぼんでくるエアーセルを指先で何度も押し試みて、

「そうか!わかったぞ。初めからエアーセル自体を膨れた形に成形しておけば、いつも膨れている。そいつにちょっとだけ空気を押し込むと、すぐに圧力が上がるじゃないか...」

松原は、周りに誰もいないのに、一人でしゃべりながら、自分自身を納得させていた。立体成型セルのアイデア誕生の瞬間であった。

左上の写真のとおり、古い試作品は、エアーセルの素材の厚みが薄いので、空気を抜けばベツタンコになってしまう。シワシワのヨレヨレ状態である。見た目も良くなく、貧素である。お客が満足するはずがない。

松原は、その解決策として、立体セルにするため素材の厚みを少しだけ厚いものを選んで試作してみた。

しかしこの試作品は、立体成型されているが、空気が抜けるとセルが腰砕け状態になり、左右に倒れ、天井部分が凹んでしまう。見た目が悪いし、凹んだ分だけ、膨らませるのに時間がかかる。

倒れにくい台形

また、松原は悩み始めた。素材を厚くし、あらかじめ立体状に成形するという目論見は挫折しかけた。

しかし、ここから設計者魂が燃え上がるのが「発明おじさん」こと、松原である。

なぜ、凹むか？実は試作品のセルは、下の写真のように、完全な立方体だった。



立方体のセルは天井部分が凹む

このため、空気が抜けると立方体の横壁が自重により倒れ込み、これに引きつられて天井部分が引き込まれるためである。

ここに気付いた松原は、

「それなら・・・、セルを台形状にしたら横壁同士が支え合い天井を支えて、形状を保ったままに維持できるのでは、・・・」



構造的に変形しにくい台形セル

この思いを実現したのが、上の写真である。このアイデアは、最終商品に生かされ、エアーセルのクイックチャージ機能のベースとなり、「スイッチ ONから使用できるまでの時間を短くしたい」という大山の夢は実現したのである。

ここで問題となったのは、ポンプである。

「もっと短時間に膨らませよう。」

という設計者の大いなる願望(?)のため、小型ながら大容量のポンプを選択していた。このためポンプの「プー」という振動音が耳障りだという。

帰山もそのことはよく知っていた。何とか静かになるよう音を抑え込まなくては、利用者はおちおち眠れな

い。

しかしどんな家電品でも、常に音対策は求められるものであり、その解決は難問なのである。

帰山は、ポンプの周りを吸音材で包んだり、ポンプの取り付け足をゴムに代えたりして、彼の持っている知識をフル活用して対策に取り組んだが、思うようにいかない。



中ケースでポンプを包む

そこで彼は、「基本に帰ろう」と思い直し、上の写真のように、ポンプ収納のためのガッシリとした中ケースを新規に作った。

このケースがひ弱なものだとポンプの振動で中ケースの壁自体が振動し、かえって大きな騒音源になりかねない。そのために壁の強度を高くした

この構造は、いわば二重ケース構造となり、音の封じ込めに大いに効果を発揮しただけでなく、ケース強度も高めることができた。

「どうや！聞こえるか？」

彼は、大山に確かめた。

「何が？」

大山は、ポンプ音の大きさが気になるかを聞かれていることさえ気づかないほどに静かだった。帰山は自信を持った。「音を封じ込めたぞ！」と。

しかし、その喜びもつかの間だった。

それは、大山がポンプ本体を床に置いたときだった。床がブルブル震えて、鈍くて低い音を発したのだ。

「あっ！」

帰山は、まだやり残していたことを思い出した。

耳触りな音は消えたけど、ポンプ本体はかすかに振動しており、その振動がポンプ本体の底面の足を伝って床を微妙に震わせていた。

彼は机の引き出しを開け、黒くて柔らかいゴムの塊を取り出し、本体の底に張り付けた。

大山がもう一度、本体を床に置いてみると、あの鈍い振動音は消えていた。ゴムの塊が振動を吸収し床への伝達を遮断したからである。

こうして帰山は、問題点を1つずつ地道に解決し、品質を高め、信頼性を上げ、さらにコストを下げて売れる商品に仕上げていった。

しかし、彼は「発売までもうすぐ。」と思いながらも悩みがあった。それは社内の生産ライン作りである。

事務局から

いよいよ新しい年度の始まりです。今年もさまざまな研修会の企画を致しました。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

平成23年1月～3月までの事務局の動き

1月8日に熊本大学で開催された機械学会で発表
日本機械学会 第23回バイオエンジニアリング講演会に於いて、**テーマ**「利用者視点からの福祉用具開発 -生活の「快」をサポートする-」について公開シンポジウムを担当しました。

1月29日・30日 佐賀大学で開催された第20回日本障害者スポーツ学会の事務局のサポートのために数名の会員の協力をいただき、事前準備から当日のお手伝いを行ないました。

ホームページに尿吸引ロボヒューマニーの情報コーナーを設けました。ヒューマニーの使い方についての詳しい情報をたくさん掲載していますのでご利用下さい。

会員更新手続きおよび新会員の募集について

NPO福祉用具ネット会員の継続手続きのお願い
平成23年度の更新手続きと会費のご入金をよろしくお願いいたします。

新規会員の募集について

また、新しい会員を募集しています。研修会などの受講に際して特典もあります。詳しくは事務局までお問合せ下さい。

23年度前半の予定

福祉住環境コーディネーター協会主催見学会の企画(前半の部)の依頼があり、4月から8月まで合計5件の見学を企画いたしました。

4月9日 老健施設 恵仁荘 諫早市
5月14日 九州エネルギー館 福岡市
6月18日 別府リハビリテーションセンター 別府市
7月9日 夢のみずうみ村 防府デイスサービス 防府市
8月6日 TOTO 歴史資料館とショールーム 北九州市
(見学のお申込はFJC協会に直接行なって下さい。)

平成23年度福祉用具研究会の会員募集をはじめました。

今年のテーマは「ポジショニング技術について」

募集定員 30名 (前年度の会員様優先)

申込み締切 4月末まで

第1回福祉用具研究会は5月11日18時から開催。

平成23年度研修会のご案内

各開催要項は会員様には郵送します。ホームページでも公開予定。

現在までに決っている研修会は以下の通りです。
9月以降の計画の詳細については次号にてご案内します。

第1回	5月28日土曜日 14時～16時 アサーション研修 パート1 より良い人間関係を築くためには ～ ご利用者様やご家族とのコミュニケーション ～
第2回	6月25日土曜日 13時30分～15時 介護職のためのスキルアップセミナーその 在宅介護における感染対策について
第3回	6月25日土曜日 15時15分～16時45分 介護職のためのスキルアップセミナーその 介護現場で知っておくと便利な応急処置
第4回	7月16日土曜日 14時～16時 アサーション研修 パート2 より良い人間関係を築くためには ～ 職場や他職種とのコミュニケーション ～
第5回	8月27日 13時30分～15時30分 認知症の方への関わり方～心理臨床の視点～
第6回	9月23日・24日(日程のみ確定) 内容:移動介助とポジショニング技術について予定 講師 生き活きサポートセンター うえるば高知 代表 下元 佳子 先生 詳細は次回の情報誌でご案内します。
第7回	10月22日 13時30分～15時30分 介護職のためのスキルアップセミナーその 排泄ケア ～オムツの上手な当て方について～
第8回	11月26日頃に予定 介護職のためのスキルアップセミナーその 家事援助で役立つ治療食の調理のポイント 予定

平成23年度の通常総会を開催

4月26日18時からNPO福祉用具ネットの通常総会を開催いたします。会員の皆様には情報誌「ささえ」35号(4月発行)に別紙で総会のご案内及び出欠届け・委任状などを同封しています。必ず期日までに届けてご提出いただきますようお願いいたします。

参加する方も欠席の方も、出欠のお返事は4月19日火曜日までに必ずお願いいたします。

あとがき

毎回、この情報誌「ささえ」の発行を継続することには、とても苦労しています。今回も、ヒューマニーがご縁で知り合った佐野様にまで原稿をお願い致しました。介護で毎日が大変な状況の中、お時間を割いていただき、とても素敵な原稿をいただきました。皆様のやさしさに感謝！です。(事務局大山)